

彼が教えてくれたこと

小川 知三

一九八九年、大学を卒業した私は木材の貿易会社に就職した。バブル景気の最中、旺盛な住宅建設を反映して、主要な資材となる木材のビジネスは活況を呈していた。

当時日本は、北米、東南アジア、アフリカなど、世界のあらゆるところから木材を輸入しており、大手商社のほとんどは現地に社員を駐在させていた。

私の就職した会社は、主にミャンマーからチークやカリンといった希少な高級木材を仕入れていた。しかし同国は政治、経済とも不安定な状態にあって、駐在員を置ける状況になく、木材の取引には事情に精通した現地の代理業者の存在が不可欠であった。

私が入社後、社宅として借上げられたアパートで、同居することになったミャンマー人のシュウさんは、そのような代理業者のもとで働いた経験を持っていた。

生まれて初めて外国、それもミャンマーの人と生活することになった私は、当初うまくやっていけるかどうか大きな不安を感じていた。というのも、私はミャンマーという国をほとんど知らず、知っているといえば有名な「ビルマの竖琴」の一節程度であったからである。

しかしその不安はすぐに払拭された。私よりも四歳年上の彼は、驚くほど日本語が堪能で、私は彼とすぐに仲良くなれたからである。母国語と日本語以外に、英語、中国語を操る彼は、なにより誠実さが魅力であった。

入社後に聞いたところによると、彼はミャンマー国内でも指折りの大学を卒業した優秀な人物であった。だが、残念なことに自分のスキルを活かせる仕事が国内で見つからなかったため、やむを得ず国外にチャンスを求めたのだった。

私は彼との生活の中から多くのことを学んだ。特に英会話に関し、彼は「難しい言い回しを日本語で考え、それを英語に変換するのではなく、ごく簡単な英語で気持ちを伝え続けられ、自然に英会話が身につく」と私にアドバイスしてくれた。

確かにその通りで、一カ月も経つと、なんとなく英語で話すコツが分かってきた。

一緒にレンタルビデオの字幕版を見ながら、「今の翻訳はあまり正しくないね」と、彼が私に解説してくれることもしばしばあった。

夕食が終わると、彼はミャンマー内陸部の都市、マンダレーの遺跡のことや、重機でなく象を操って木材を搬出する話、パゴダと呼ばれる仏塔での参拝の仕方など、母国の様々

な話を私に語ってくれた。

彼はあまり自分の家族の話はしなかったけれども、いつだったか彼にはお姉さんが一人いて、不自由な経済情勢の中、母国で医者として懸命に活動していることを彼から聞いた。

そんな彼に、私はミャンマーに何が最も必要かと尋ねたことがあった。

私は経済発展のための「資金」や「技術」という答えを予想していたのだが、彼は迷わず「教育」と言った。

彼は私に真剣なまなざしで「国民が等しく教育を受け、賢くなることが祖国の未来につながる」と述べた。さらに彼は「日本人である君がうらやましい。教育のレベルに応じて報酬が得られるのだから」と付け加えた。私はそれが普通だと思っただけに、その言葉に大きな衝撃を受けた。

私は彼に「いくら教育を受けても、君のように報われない人が増えるだけでは」と疑問を呈した。すると彼は「自分のような人間が、海外ではなく母国で生活できるようになるために、教育が必要なのだ」と言った。

当時、結論が出ないまでも、彼とこうした議論を交わしたことは、その後、政治や教育について考える上で、大きな財産となったと今になってそう思う。

彼との共同生活は、わずか二ヶ月程度しかなかったのだが、毎日が楽しかった。

日本でのビザが切れた彼は、アメリカで建築の仕事をしているお兄さんを頼ると言って日本を離れた。

その三年後、私は結婚したことを報告しようと、彼に一度手紙を出したことがあった。一カ月ほど経って、彼からおめでとくと書かれた手紙が返ってきたものの、残念ながらそれ以降、彼とは音信不通になってしまった。

彼が日本を去ってから既に二十五年が経つ。ミャンマーも当時とはだいぶ情勢が変わった。日本をはじめ多くの国から将来を有望視されるようになり、同国への投資も右肩上がりだ。

ミャンマーに関するニュースが伝えられるたび、私は彼のことを思い出す。そして、アメリカからミャンマーに戻り、今頃どこかの学校で教鞭をとっているかもしれない彼の姿を想像してしまうのだ。おそらく彼のことから、かつて私にミャンマーのことを語ってくれたように、自分の生徒たちに対して、日本での出来事を正しく、ユーモアを交えて話すに違いない。

もしもそのとおりであったなら、私はミャンマーを訪れ、彼に「長い間待った甲斐があ

って、本当によかったね」と自分の気持ちを伝えたいと思うのだ。